

当科における顔面外傷症例の検討

市立室蘭総合病院 形成外科

中 川 嗣 文 石 崎 力 久

要 旨

当科にて平成16年1月から平成19年12月までの4年間に診療を行った顔面外傷症例406例について、検討を行った。

当施設での顔面外傷症例では、10歳未満と70歳代にピークを持つ特徴的な年齢分布を示し、受傷原因としては約6割が転倒・転落であった。

顔面骨骨折例では、手術例の占める割合は他施設での報告に比し小さかった。

全体の症例数は著明な増加傾向にあり、当地域の医療情勢の変化が少なからず影響していると考えられた。

キーワード

顔面外傷、顔面骨骨折、統計

緒 言

形成外科では日常の診療において顔面外傷を取り扱う機会が多く、これまで多くの統計資料が報告されている。一方、その内容は各医療機関の地域性、診療規模の相違などにより、それぞれの特徴が見られる。今回、平成16年から平成19年の4年間に当院当科にて加療した顔面外傷症例につき、集計、検討を行ったので報告する。

対象・方法

対象は平成16年1月から平成19年12月までの4年間に顔面外傷にて当科を受診した406症例である。

性別、年齢、受傷原因等の各要素について集計し、室蘭市の人口構成、北海道での交通死亡事故の発生状況を

踏まえ、検討を行った。

結 果

1. 症例数の推移

症例数の年次推移を図1に示す。平成19年での著明な症例数の増加が見られた。

2. 性別、年齢分布

男性244例、女性162例で男女比は1.5:1であった。

年齢別の症例数を図2に、室蘭市の年齢別人口構成¹⁾を図3に示す。0～9歳の症例数が最も多く（92例、22.6%）、次いで70～79歳（54例、13.3%）、10～19歳（51例、12.5%）の順であった。

3. 受傷原因

受傷原因の内訳を図4に示す。転倒・転落（237例、

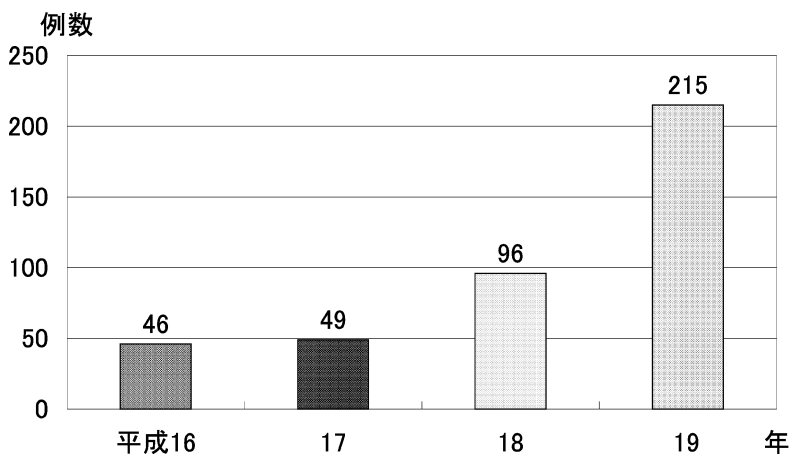


図1 顔面外傷症例数

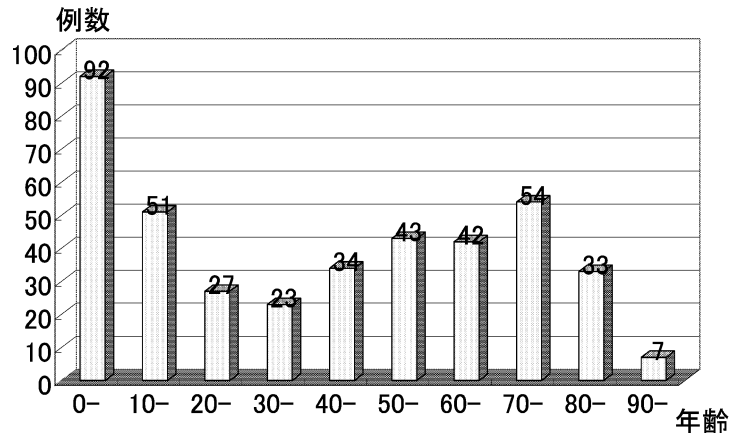


図2 年齢別症例数

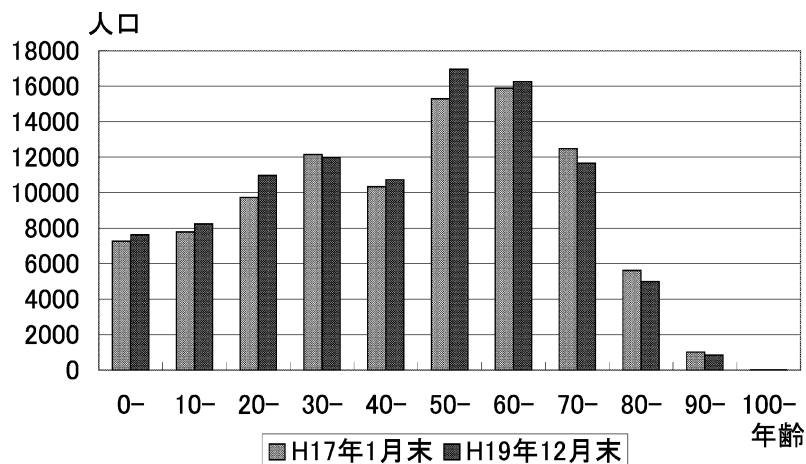


図3 室蘭市年齢別人口構成

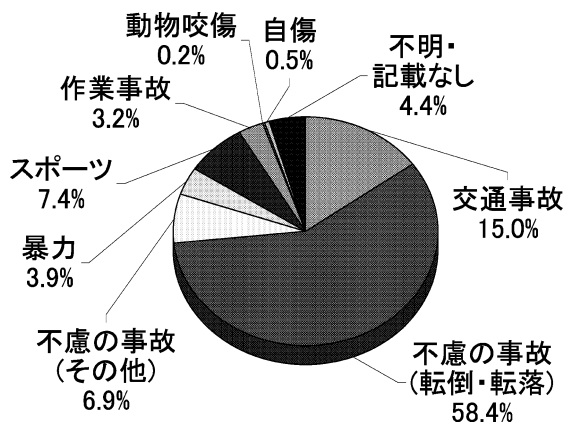


図4 受傷原因

58.4%) が最も多く、交通事故 (61 例、15.0%)、次いでスポーツ (30 例、7.4%) の順であった。

4. 月別症例数

月別の症例数を図5に示す。10月(57例、14.0%)が最も多く、1月(19例、4.7%)が最も少なかった。比較対象として、北海道での交通死亡事故月別発生件数²⁾を図6に示す。

5. 救急搬入

救急搬入が101例(24.9%)、独歩受診が305例(75.1%)であった。救急搬入症例のうち他部位に合併損傷を伴っていた症例は33例(32.7%)、顔面外傷のみの症例が68例(67.3%)であった。合併損傷部位の内訳を表1に示す。合併損傷の部位は四肢(13例、39.4%)、頭部(12例、36.4%)、胸部(7例、21.2%)の順で多かった。

6. 軟部組織損傷

縫合を要した症例が174例と最も多く、擦過傷など軟膏治療のみで加療した症例が81例、打撲など患部の冷却で加療した症例が32例であった。

受傷部位の内訳を表2に示す。眼周囲(62例)、額部(46例)、口唇部(27例)の順で多かった。

7. 顔面骨骨折

顔面骨骨折を伴っていた症例は92例であり、うち手術例は23例であった。

骨折部位の内訳を表3に示す。鼻骨(45例うち手術例9例)、頬骨(24例、うち手術例8例)、下顎骨(10例、うち手術例5例)の順で多かった。

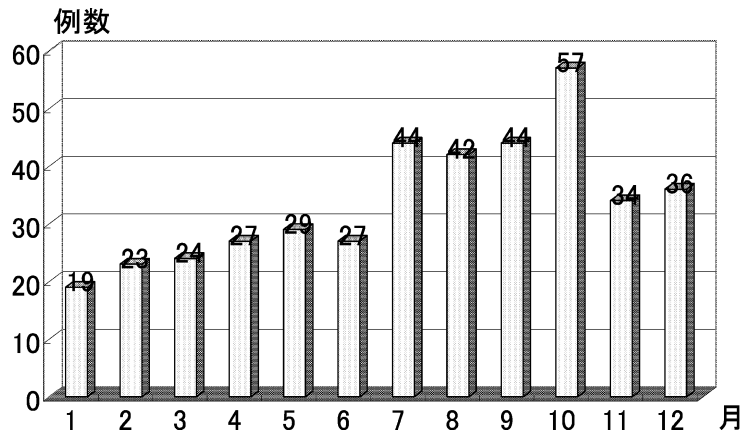


図5 月別症例数

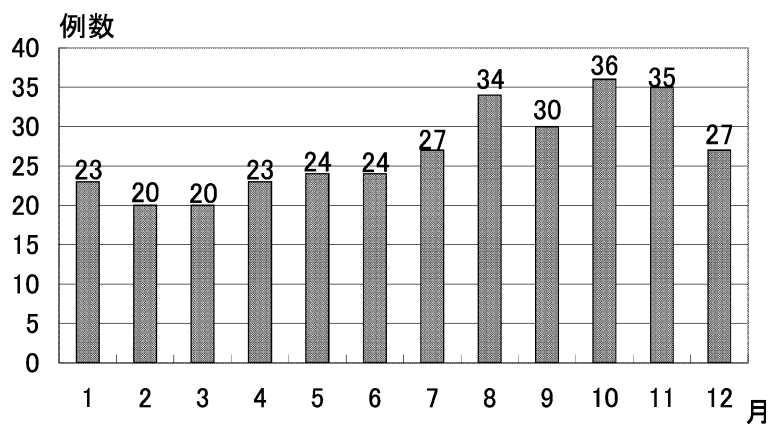


図6 北海道内交通死亡事故月別発生状況

表1 合併損傷部位

部位	頭部	頸部	胸部	腹部	四肢
例数	12	4	7	2	13

表2 軟部組織損傷部位

部位	額部	眼周囲	鼻	頬部	口唇	下顎
例数	46	62	21	21	27	15

表3 顔面骨骨折部位

部位	鼻骨	頬骨	上顎骨	下顎骨	鼻篩骨	眼窩壁
例数	45(9)	24(8)	9(0)	10(5)	3(1)	6(0)

() 内は手術例

考 察

1. 症例数の推移

室蘭市の人口は平成17年1月末で100263人、平成19年12月末で97569人であり、漸減傾向にある。にもか

わらず、顔面外傷症例数は単調増加傾向にあり、特に平成19年に入ってから急激な増加が際立っている。

その背景として、当地域の医療情勢の変化による影響が挙げられる。平成19年1月より当地域において脳神経外科医が常勤する総合病院は当院のみとなっており、頭部外傷患者が多数当院へ搬入されることとなった。顔面外傷症例が急激に増加した原因の一つとして考えられる。

2. 性別、年齢分布

男女比は1.5:1であった。緒家の報告例^{3)~14)}では2:1~3:1というものが多く、男性が多いという点では同様であるが、その比率の差は比較的小さい。

年齢分布では、10歳未満および70歳代にピークを持つ2峰性分布を示していた。室蘭市の人口構成としては平成20年1月末で10歳未満が6.5%、70歳代が15.1%と症例数に対応する人口が極端に多いわけではない。他施設の報告では、50歳代までの活動性の高い年代で多いという報告が多く、この分布は当施設に特徴的であると考えられる。

3. 受傷原因

受傷原因としては転倒・転落が最多で約6割を占める

のが特徴である。10歳未満の若年層では活動性の活発さや、未熟ゆえの危機回避能力の低さが、高年齢層では老化による反射的回避能力の低下が転倒・転落による受傷の大きな要因となる。大都市圏の施設では、交通事故が受傷原因として最多とする報告が多い^{3)~11),13),14)}一方、地方中核都市に位置する施設では当施設と同様、転倒・転落が最多とする報告^{12),13)}も見られる。大都市圏と比較し、地方では交通量が少ないこと、高齢者が人口に占める割合が高いことがこのような地域性を生み出している」と推察される。

4. 月別症例数

全体の分布では7月から10月に多く、1月から3月は少ない傾向であった。前述の受傷原因において、最多である転倒・転落での受傷例は年間を通して多数受診しているが、スポーツでの受傷例に関しては、サッカー・野球などのスポーツ合宿、試合が多数行われる夏から秋に集中していることがその原因と考えられる。また、レジャーなどでの交通外傷での受傷例が夏から秋に多いことも一因であると考えられる。北海道警察本部発表の平成19年月別交通死亡事故発生状況でも、7~11月において発生件数が多い傾向が見られている。一方、冬期間は外出を控えるなど活動性が低下し、受傷機会が減るためこのような結果となったと考えられる。

5. 軟部組織損傷

開放性損傷にて縫合を要した症例が多い結果となった。受傷部位としては突出部が多く、他施設での報告でもほぼ同様の傾向であった。転倒の際に受傷する部位としては矛盾しない結果と考えられる。

6. 顔面骨骨折

全骨折例92例に対し、手術例は22例(23.9%)であった。骨折部位としては鼻骨・頬骨が多く、他施設での報告とはほぼ同様であるが、他施設では手術例の割合は40%~80%と報告されているものが多く^{4)~8),11)}、当施設では他施設での報告と比較して手術例の占める割合は低い。特に鼻骨で非手術例が多いが、高齢であり、整容的改善を希望しない症例が多いことがその要因と考えられる。若年者においても、特にスポーツでの受傷例では、遠征時の受傷のため地元での加療を希望し当院での加療を希望しない例や、仕事が休めない、スポーツの試合に近いなどの理由により手術に伴う入院期間を嫌い、手術を希望しない症例が多く見られた。一方頬骨骨折においては、高齢者の自宅・および施設内での転倒による受傷が多く、開口障害などの症状を認めず、手術適応となる症例が少なかった一方、若年者では交通事故や高所転落など比較的高エネルギー外傷が多く、手術を要する例が多かった。

下顎骨骨折に関しては、下顎骨単独の骨折では歯科口腔外科のある近隣の病院を紹介することが多かったが、

多発外傷例や、開放骨折例では当院にて観血的整復や顎間固定での治療を行った。

結 語

当科で診療を行った顔面外傷症例について検討を行い、当院の顔面外傷症例の特徴を示した。

- 1) 症例数は著明な増加傾向にあり、受傷原因としては転倒・転落が最多であった。
- 2) 年齢分布としては10歳未満および60~80代の高齢者が多く2峰性の分布を示した。
- 3) 顔面骨骨折部位では鼻骨、頬骨、下顎骨の順に多かったが、手術にいたる症例は他施設での報告に比し少なかった。

文 献

- 1) 室蘭市役所：室蘭市住民基本台帳人口統計資料—2008.
- 2) 北海道警察本部交通企画課：北海道の交通事故概況—2008.
- 3) 竹野巨一，中川あかね，佐々木健志，工藤章裕，桑原広昌，本田耕一：顔面骨骨折の臨床統計的検討——帯広厚生病院における5年間の入院症例——. 形成外科 47: 1237-1243, 2004.
- 4) 茂木定之，谷祐子，生田義和：顔面外傷症例の統計的検討．整・災外 37: 1497-1500, 1994.
- 5) 横内哲博，平野明喜，藤井徹：最近の顔面骨骨折2472例の検討．日形会誌 20: 343-349, 2000.
- 6) 渡邊哲，神谷祐司，藤原成祥，大重日出男，斉藤輝海，加藤伸一郎，牧泉，小田邦博：当科における過去10年間の顎顔面骨折の臨床統計的検討．愛知学院大歯会誌 40: 391-395, 2002.
- 7) 野田弘二郎，保坂善昭，村松英之，上田拓文：昭和大学病院における顔面骨骨折10年間1415例の統計的検討．昭和医会誌 65: 325-336, 2005.
- 8) 小池剛史，横山信太郎，上原忍，山崎正詞：当科における過去15年間の顔面中1/3骨折の臨床統計的検討．信州医誌 50: 353-359, 2002.
- 9) 奥山典秀，藤原一人：津山中央病院形成外科における2001年4月(開設)から2002年3月までの外来，手術についての統計的観察．津山中病医誌 17: 25-29, 2003.
- 10) 西川典良，瀧田正亮，京本博行，高田清治：顎・顔面骨骨折の集計報告Ⅲ(平成9年10月~平成12年9月)．大阪済生会中津病年報 11: 158-162, 2001.
- 11) 長谷川稔文，雲井一夫：顔面骨骨折104例の臨床統計的検討．耳鼻臨床 99: 961-965, 2006.
- 12) 市村竜治，藤岡正樹，田崎公，矢加部文：長崎医療

-
- センター形成外科における顔面骨骨折 60 例の統計的検討．国立機構長崎医療医誌 8: 9-12, 2005.
- 13) 藤岡正樹，西田温子，大安剛裕，近藤方彰：顔面骨骨折 307 症例の統計的検討：都市部症例との比較．宮崎医師会誌 24: 111-114, 2000.
- 14) 瀧川富之，寺門正昭，上原浩之，上原任，本田雅彦，関和忠信，佐藤廣，橋本光二，本田和也：顎顔面骨折の臨床統計的観察——2．20 歳代と高齢者（60 歳以上）との比較——．日口腔診断会誌 15: 252-256, 2002.